

「赦しとは理解」

～あなたは罪を本当に理解していますか?!～

ローマ1:28～2:16

評価されないと人は成長しません。しかし人の評価は、批判や中傷することに陥りがちです。現れた行為に対して人が間接的に評価することは危険なことです。また、特に子育てにおいて、ほめられることを求めさせるようなほめ方も良くありません。評価は神がすることです。だから私たちは神の評価を伝えていかなければいけません。「あなたは多くを頑張っている。ところが非難すべきところがある。」(黙示録)というように、神は私たちが成熟するように評価や叱責をされます。自分のことが見えずに人のことを見ると中傷してしまいます。しかし隣人は私たちが愛を流すために与えられたのです。神様に目を向けて、神様がその人を見る目で、その人を見なければなりません。

赦しとは理解です。自分の罪を知らない人と人を裁くようになります。「私は正しい、あなたは間違っている」と、正義を振りかざして否定するのです。憲法はそうなっています。旧約聖書に「罪から来る報酬は死です」とあります。憲法は旧約聖書に基づいて作られました。憲法ではこの死は肉体的死刑となります。聖書では違って魂・霊の死のことです。私たちは罪が分かっています。人がとった行動に対しては罪がよく分かっています。しかし、自分が行う罪は理解していません。その罪を聖書の真理と比べ、自分の罪を理解しなければいけません。子どもたちに聖書の真理と比べて伝えていってください。大人がこの世の罪を聖書の真理に照らし合わせて闘っている姿を、子どもたちに見せていかなければなりません。神の真理に照らし合わせて、罪人について「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そして、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。」(ローマ 1:29～31)とあります。私たちは何個当てはまるのでしょうか。教会内で比較し裁き合い分裂が起こるのは、罪が分かっているからです。奉仕をする人は罪人だと分かっているならば、自分は奉仕をしてはならない者だという理解があります。おごり高ぶってはいけません。また、奉仕をしない人は、神の前に恐れ多い奉仕をしている人のために、正しく歩めるように祈らなければいけません。それが家族です。奉仕後には、罪があったか、高ぶりがあったか省み、正しかったか判断することが大事です。省みと次の成長につながります。私たちは罪人の頭です。それを理解すれば、裁き合うことはなくなり、愛し合うようになります。そして罪を犯すのには理由があります。その理由を理解して寄り添うのが教会です。

権利を主張できるのは、義務を果たしたときだけです。レストランではお金を払う義務を果たしているのに、食事の権利を主張できますが、家を出された食事に子どもは文句を言う権利はありません。子どもが文句を言うことは悪いことだと分かっていますか。悪いことだというのは真理から学ばなければなりません。感謝の心があれば、それが文句だと分かります。この世の悪を見たときに、聖書の真理と照らし合わせなければいけません。家族は権利で向き合うのではなくて、聖書の真理で向き合わなければなりません。親は、子どもの前で「あの人はねえ」と、人を人と思わず見下して悪口を言っていないでしょうか。罪を理解しなければいけません。罪人であると理解しなければいけません。罪人であると理解していれば、理不尽に怒ることもなくなります。子育てはうまくいきます。子を訓戒し、真理・愛によって子育てし、神様から預かった子を悪くして返さないようにしてください。自分が正しいと思っていることは悪です。信仰によって義と認められるのであって、行いによるものではありません。

罪を理解し、罪を赦すためにイエスキリストは十字架に架かりました。イエスキリストの前に罪を悔い改めるものは救われます。だから罪を知らないと救われません。イエスキリストを信じて、自分は罪人の頭だと分かり、ごめんなさいと

謝ることができて初めて救われます。私は正しくてあの人は罪深いと言っているのは、裁いているのです。人より自分の方が幸せ、人より自分の方が正しい、人よりまし、階級が好きなど、優位に立つのは、あなたが悪魔になっています。パリサイ人は上座が好きで「まむしの末たち」と言われました。

①信仰義認 対 自己義・かたくな・がんこ・優越感・自己中心 罪を知ることが義に導く道!!

これらは罪の土台です。罪人の頭である私たちは信仰によって義と認められたのですから、真剣に向き合う奉仕は神様にお返しする感謝なのです。神を愛し礼拝を愛し、礼拝の恵みが自分を変えると知っています。礼拝は神様の与えた最大の恵み、祝福、癒しです。神に愛されているので、奉仕でお返しするのです。自分の能力が高いと信じて裁き、教会のハーモニーを壊していませんか。私たちはかたくなであり、がんこであるので、毎日「罪人の頭であり、悔い改め赦されたんだ、十字架のイエスに贖われ変えられた」と、自分を見なければ変わりません。かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りを自分のために積み上げているのです。(ローマ 2:5) 指摘されるのは感謝です。指摘に対応すればよいのです。こちらからは指摘しません。指摘せず、寄り添い理解するのは良いことです。

②聖書は罪を知るためにある

- ・現れた罪ではなく
- ・秘められた罪が問題である
- ・それに気がつかないことはもっと大きな罪

パリサイ人と取税人の祈りについてあります。パリサイ人は自分の方がましだと思いました。(ルカ 18:9～14) もしあなたが、パリサイ人を悪いと思っているなら、自分の罪を分かっているということになります。このパリサイ人は自分のことであると気づけないといけません。取税人は自分の罪を見つめ悔い改め礼拝しました。神は取税人の方を赦しました。神は、内側の心を見て評価しています。神が見ているのは、表に現れた罪ではなく、秘められた思っている罪です。自分の中にどれほど汚い罪があるか、しっかり見てください。人を何人排除したか、何人心の中で殺したか、何度うそをついたか、権利を主張したか。罪を理解していないことが罪です。

③神が与えた良心に忠実に

- ・良心と罪に対する理解が赦しと回復と協調に向かう
- ・これがないと自分に甘く人に厳しい人になる

教会の一致を祈るとき、自分の罪を理解することがすべてです。自分の中にある罪を探し、真理を探さないと、自分に甘く人に厳しい人になります。自分がしないことを自分は赦すが、人がしないのは赦せない、ということはないですか。神はえこひいきしません。神から見えて罪の大小はありません。神が与えた良心に忠実に生きなければなりません。腹が立つ感情が湧き上がったときに良心が負けてしまっていないか?良心は文化により鈍ってきます。いろいろが当たり前の文化がある国もあります。良心を敏感に保つには、いつも真理と照らし合わせていなければなりません。まあいいかとばかり思っていると、鈍ってきます。欲がはらんで罪となり、罪が熟して死に至る。だから、今日一日を良心で探り、聖書の真理に照らし合わせて、感情に負けないで、決断しなければいけません。良心に基づいて赦していかなければいけません。神の前に自分の罪を理解できれば、人を赦することができます。マグダラのマリアのように、多くを赦された者は多くを愛します。聖霊によって、自分の罪が分かれますように。神はこんな私たちを愛し赦し祝福してくださいことに感謝します。

(要約者:高橋 奈津江)

(2019年5月12日)